二歳児の「独占する」ということの発達的意味

阿部　和子

自発性を軸に子どもの育ちを追いかけていると、二歳代（子どもにより多少のずれはあるが）には、もの（玩具など）やこと（ボタンをはめること）に執着して他の子と、あるいは大人との間に、時に激しいやり取りが展開される場面に出会う。これらの行動は集団で生活していると、「玩具を独占し困ったこと」であるとか「できないのにいつまでもやりたがり、あげくの果てにはかんしゃくを起こし対応に困る」というように困ったこととして捉えられやすい行動のようである。

しかし、自発性を軸にして子どもの育ちを見ていこうとすると、これらの行動は「自己」が獲得されるその前の経験群として位置づけられるものと考える。このあたりのことを具体的なエピソードを通してみてい

きたいと思う。

次にあげるエピソードは「もの」そのものではないが「おかあさん」ということばをめぐってのそれである。

エピソード1

朝のおやつの時間、子どもたちが席についているときにかずき君（三歳二ヶ月）はお母さんと登園してくる。保育室に入るところをてんぺい君（二歳十一ヶ月）が見つけて、「かずき君のおかあさん」という。それを聞いた、てんぺい君の前に座っているが、入り口に背を向けて座っていることえちゃん（二歳四ヶ月）が、すかさず「ちがう、ことちゃんのお母さん」という。すると、てんぺい君が「かずき君のおかあさん」とことえちゃんの言ったことを訂正するように大きな声で言う。ことえちゃんはその声の大きさに圧倒されたのか泣きながら「ことちゃんのお母さん」という。

エピソード2

朝、お母さんと手をつないでことえちゃん（二歳七ヶ月）が保育室に入ってくる。ことえちゃんはお母さんの後をついて歩いている。お母さんが、ことえちゃんの布団に洗ってきたカヴァーをかけている。そこへこうた君（二歳十一ヶ月）が寄っていくと、ことえちゃんが「ことちゃんのおかあさんだよ、これ」とお母さんを指差しながら言うと、こうた君も「ことちゃんのお母さん」と言いながらことえちゃんのお母さんを指差す。こうた君が、ことえちゃんの言うように、ことえちゃんのお母さんだと認めているにもかかわらず、ことえちゃんは、「ことちゃんのおかあさん」と繰り返し、こうた君はにこにこしている。すると、ことえちゃんはこうた君の顔を覗き込むようにして「ことちゃんのおかあさん」と力を込めて何度もいう。

エピソード3

朝のおやつの時間、子どもたちはそれぞれテーブルについている。突然のようにゆうた君（三歳一ヶ月）が振り向いて背中合わせに座っているこうた君（二歳四ヶ月）に「ゆうた君のブーブー」と大きな声でいう。すると、こうた君が「ぼくの」といい、二人で「ぼくのブーブー」「ゆうた君のブーブー」と言い合い譲らない。こうた君の前に座って、そのやり取りをみていたなるみちゃん（三歳〇ヶ月）が「みんなのブーブーなの」と仲裁に入るが、二人は張り合いつづける。すると、ゆうたくんが「ゆうた君のママのブーブー」という。こうた君も負けずに「ママ（自分）のブーブー」という。すると、なるみちゃんは「みんなの、おかあさんのじゃない」とそれぞれに言い合う。しかし何時の間にか「なるちゃんのブーブー」と三人で言い合いになる。

以上のエピソードは、いずれも朝のおやつのためにテーブルに付いているときのものである。

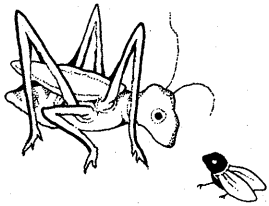
このエピソード1と2はことえちゃんの二歳四ヶ月のときのものと二歳七ヶ月のときのものである。ことえちゃんは「お母さん」と言うことばは、自分のものだとゆずらない。それは、「お母さん」ということを獲得するまで、更に獲得した後も繰り広げられたたくさんの経験と結びついている、思い入れの強い情緒的な「ことば」だからである。そしてこの時の自己は、この情緒的な思い入れ＝お母さんとの具体的な経験群の中に埋没していると考える。つまり、経験群と思い入れが一体となっていて、そしてその気持ちの主体である自己もそれらと未分化な状態にあると考える。

そのように考えると、ことえちゃんが「ことちゃんのおかあさん」ということばを独占することで、お母さんとの経験群＝自分の思い入れを独占することになる。それは、自己を他と区別されたまとまりとして、

またそのまとまりの主体になっていくために必要な経験と考えられる。それは、エピソード1に見るように、独占することをめぐって他の子とのやり取りが展開される。そしてそのもの（＝「お母さん」）に対する思い入れが強ければ強いほど強力に主張し、その主張が強ければ強いほど、周囲の他の子の抵抗も強い。その厳しいやり取りを通して、時に大人にその場面の交通整理をしてもらいながら、「お母さん」ということばに対する思い入れ（＝気持ち）と、そのように思うことが分化して、気持ちの主体としての自己の獲得へと至ると考えられる。

それはこの時期にものを独占することと並行して観察される「じぶんで」「ひとりで」と、「それをすること」に執着する、つまり行為の独占とでも呼べるような姿からも同じようなことが考えられる。例えば、できないのに一人でボタンをはめようとしてうまくいかずに泣きだすとか、ブロックを組み立てようとするのだが、うまく差し込むことができずにブロックが落ちてしまう。それを、手伝ってあげようとする手を振り払って、何回も試みやっと差し込めて、大人に誉めてもらったりするというものである。ここでも行為することと＝それに向かう自己が未分化のままにあるが、できないことと気持ちのずれの経験、できたことと周囲の賞賛の経験などを通して、行為することとそれに向かうものが区別されて「行為の主体」としての自己の獲得へと至ると考えられる。

そして、エピソード3のゆうた君やなるみちゃんのように、形勢が不利のときに頼りになる「ママ」を持ち出すことがあっても、「おかあさんのじゃない。みんなの」というように、「お母さん」ということば



を独占することから、卒業することになる。二歳前後から、母子密着と呼べるような、母子関係に落ちつきを見せるようになる。そしてエピソード1のてんぺい君のように自分のお母さんとは別に「かずき君のおかあさん」、エピソード2のこうた君のように「ことえちゃんのお母さん」と言えるように、お母さんはそれぞれにいることが分かる。

以上のように、独占することをめぐってのやり取りを通して、不確かにではあるが自他の区別がつき始め、その区別されたもの（思ったり、したりする）の主体として自己や他者が現れることになる。

これまで見てきたように、自己は、二歳代の終わりから三歳のはじめにかけて、ものとそれに向かう自分が分化し、行為することとそれに向かう自分が分化し、そしてそれらに向かうまとまりのあるものとして自分という感覚が獲得され、おぼろげながら自己が外界から区別されて自己の輪郭が出来上がると考える。自分が自分になっていくためには、具体的な経験を通してであること、そして、その経験をより深く独占することが確かな自己感を育てると言えそうである。このように考えてくると、この時期のこだわりや独占、やりたがることを存分に経験させてあげたい。もちろんそこに大人がいて、子どもの今の状態を子ども自身がまとまりを持って捉えられるよう援助すること、そしてそのまとまりがどのような意味を持つことなのか分かるように言葉を添えながら援助することが重要である。

次に、この行為する主体としての自己の輪郭がやはり、ものや行為や場所を自分のものとして主張する（独占する）ことを通して、そしてそれをめぐるやり取りを通して、より明確に意識されるようになる様子を見ていくことにする。

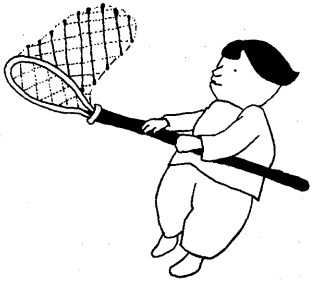
エピソード4

朝から雨のため室内で遊ぶことになる。保育者がその準備をするために子どもたちにロッカーの前に座って待つように言う。子どもたちは保育者が室内遊具を出す様子を期待を込めて何やら言い合いながら見ている。その内、観察者の側にいたひろき君（三歳一ヶ月）が泣き出す。観察者が「どうしたの？」と声をかけると、観察者の隣に座っているなるみちゃん（三歳一ヶ月）を指差しながら「ひろきの、ひろきの」と言う。指差されたなるみちゃんは困惑した表情でそこに座りつづける。観察者はあれこれ思いを巡らせ、ロッカーの名前を見ると、なるみちゃんはひろき君の名前の書いてあるロッカーの前に座っている。そこで「ひろき君のロッカーの前になるみちゃんが座っているの？」と言うと「うん」と言う。観察者は子どもたちはそれぞれ自分のロッカーの前に座っているのかと思い、「なるみちゃん、ひろき君が自分のロッカーの前に座りたいんだって、かわってあげる？」と聞くと、なるみちゃんはいやいやと言うように頭を振って自分の名前の書いてあるロッカーを指差して、自分のロッカーの前には別の子が座っているので、代われないことをいう。そこで事態が飲み込めた観察者が「ひろき君、みんな違うところに座っているんだって」と言ってみるが、よく見るともうロッカーの前があいていない。ひろき君だけロッカーの前からはみ出している。ロッカーの前でなくてもいいんじゃないかとひろき君に言ってみるが嫌だと言う。そのやり取りを聞いていたなるみちゃんが少し詰めて隙間を作ると、その狭い隙間に無理やり入り込んで窮屈そうに座る。

エピソード5

朝の散歩に行く前の時間、ひろき君（三歳一ヶ月）は自分のロッカーにお尻を入れて座っている。それまで別の遊びをしていたれいなちゃん（三歳三ヶ月）が、ひろき君のところへいって、ロッカーからひろき

君を引っ張り出そうとするが、ひろき君はロッカーを取られまいとするように力を入れて座り込む。そこでれいなちゃんは力づくをあきらめて「ここじゃ、テレビが見えないよ。あっち」とテレビが見えやすい方向を指差す。しかし、ひろき君は動かない。れいなちゃんはテレビの音楽に合わせて踊り出す。ひろき君もロッカーを離れてれいなちゃんのところへ行って踊り出すと、すかさずれいなちゃんはひろき君のロッカーへ行って座ってしまう。ひろき君は慌てて戻るが「すーわっちゃった」と言って動かない。ひろき君は「れいなちゃんのロッカーはあっち」とれいなちゃんのロッカーを指差すがれいなちゃんは動かない。ひろき君は何とかれいなちゃんを動かそうとしているうちに、自分のロッカーの中の帽子を出してしまう。するとれいなちゃんが「あーあ、だしちゃった」と非難するように言うと、ひろき君は慌てて帽子をロッカーに戻そうとするがれいなちゃんは体を張って、入れさせてあげない。その様子を見ていたかずき君（三歳一ヶ月）がれいなちゃんを打つ。れいなちゃんが泣きそうになるとひろき君が「けんかしないでね」と言う。するとれいなちゃんは「テレビ、見よっと」と言いながら、そこを離れるそぶりを見せるが、ひろき君がロッカーの前を動かないでいる。れいなちゃんは「やーめた」と言ってロッカーを離れていく。ひろき君はようやく自分のロッカーに座ることができた。



エピソードの4と5はひろき君のロッカーをめぐってのものである。ロッカーは、子どもにとって保育園

と家庭をつなぐ場所であり、自分の持ち物（＝それぞれ思い入れのあるもの）が収められている。また、保育園の中では、より家庭（＝母親や父親に代表される安心できるもの）に近い場所である。

エピソード4は、保育者が遊びの準備をするのを待っている場面、どこに座ってもいいのであるが、自他の区別がつきだし、「おんなじであること」や「みんないっしょ」ということに快さを感じだした三歳前後の子どもにとって、ひとりだけみんなと違うということは不安定になりやすい状態であると考えられる。そこで、安定することを求めて「自分のロッカー」を主張する。

またエピソード5は、やはり朝であり、生活の節目の不安定な時間、ひろき君は保育者の側に行くほど危機的ではないのか、自分のロッカーに入り込んでいる。れいなちゃんは、いつもと少し違うひろき君に注意を引かれて、それは、ロッカーが関係あるらしいことを分かり、それを取り上げようとする。ひろき君とれいなちゃんのやりとりは、今の持てる力を全部使って、相手の場所（ひろき君の気持ちの込められた）を自分のものにしようとする、または自分の場所（＝そこに込められた自分の気持ち）を守るために、持てる力を全部使ってのやりとり・とりあいは自己の気持ちをより確かに自分のものにするために重要であり、またこのやり取りを通して他の気持ちに気づいていくための大切な経験群としても位置づけたい。当然ここには大人の仲立ちが必要になる。

自己の中心（＝欲求）を強力に経験しその感覚をより確かなものに、そして、それと他との区別のための経験群とし、それ以後の自己の育ちにおいても、ものの取り合いや対立を位置づけたいと考える。

（聖徳大学短期大学部）